

特242
930



1

0024557-000

特242-930

新東亜建設の要諦

砂田久政・著

国防協会

昭和14

ADE

この著作物は、著作権者不明のため、著作権第67条の規定に基づき、平成12年3月
けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

特242

930

防協會會長
陸軍中將 鈴木一馬閣下序
軍事通信社
國防協會主事 砂田久政著

新東亞建設の要諦

東亞プロツクの防衛と
大生命線の確保

東京 國防協會發行

38
4

特242
930



22

新東亞建設の要諦

國防協會會長 陸軍中將 鈴木一馬閣下序
軍事通信社 國防協會主事 砂田久政著

東京 國防協會發行



陸軍大臣 荒木貞夫閣下題字
陸軍大將 林銑十郎閣下題字
陸軍大將 鈴木孝雄閣下題字
陸軍大將 畑俊六閣下題字
陸軍中將 木原清閣下題字
軍事通信社 砂田久政著
國防協會主幹

(定價金八拾錢)
(送料 六錢)

白刃長槍に夜は明け

◎有益なる美談資料として 江湖の士へ推奨する
陸軍省軍事調査委員 陸軍歩兵中佐 藤堂高英

余は曩に今次事變地を新しく踏査し圖らずも白兵相搏つ教化附近血戦の壯撃を實地に見聞した。就中砲臺山勇士の血戦、駝腰子守備隊及救援隊の奮闘——蘇武歩兵軍曹の活躍——大橋守備隊の奮戦等は何も白兵の血戦を演じ、而も現代戦に最緊要なる歩砲協同の眞價を發揮し軍人精神を發揚した。蓋し極めて有益なる美談資料として茲に普く江湖の士に推奨する所以である。……軍隊の教育資料として亦國民必讀の良書と認む。余徐に讀去り血湧き肉躍り自ら戦闘渦中に在る思を致せり。今本書を公にせらるゝの時當に時宜を得たるものと謂ふべく軍隊の教育資料として又愛國思想強調の爲にも國民必讀の良書と認め廣く國民に推む。

東京市四谷區舟町六二

發行所 軍事通信社 振替 東京 六一六五二 番

序

國家民族の發展は軍備の充實に待たざるべからざるは、多言を要せずして明なりとす。

皇軍は今や御稜威と忠勇なる將士と、之を支持する銃後の赤誠とにより、正義に立脚せる帝國に對する自然の導きとして、支那大陸の中樞核心を悉く占據し、聽て蔣政權の没落を見んとするに際會せり。

此時に當り、砂田久政君が「新東亞建設の要諦」と題する記述を著はし、經國の大策を披歴して、之を世人に問はんとする

に對し、予は衷心より共鳴同感を禁じ得ざるものあり。
 憶ふに、新時代に對しては新國策を必要とす、而して本記述
 は元より、其抱負の一端を陳述せられたるに過ぎなくも、概ね
 簡にして要を得たるものと云ふべく、現下非常時に於ける好著
 たるを疑はず、茲に江湖に絶獎する所以である。

昭和十三年十二月

鈴木一馬

目次

一、緒言……………(一)

二、東亞ブロック出現の必然性……………(四)

三、ブロック體制内部の整備……………(九)

四、新體制當面の對外關係……………(二二)

五、防協強化と金保有の問題……………(三二)

六、大生命線の防衛と日本國民……………(三九)

七、結言……………(四六)

新東亞建設の要諦

砂田久政著

一、緒言

今や、わが大日本帝國の生命線は西のかた遠く阿爾泰山脈を連ね天山南北路の地域一帯に延びて、まさにキルギスの大曠野を指呼せんとしてゐる。笑ひ事ではない。これが昭和十三年下半年期以後の日本國民にとり、血をもつても護らねばならない大生命線の西方の限界となつたのだ。儼然たるこの事實に對して正確の認識を持たない者ではあひ共に時務を語るに足らず、またそうした認識なしに廟堂

に立つ政治家が若し有りとするれば、皇國の前途を謬らんことも實に必然である。

回顧すれば明治三十七年、日露兩國の間に戦ひの火蓋が切られるまでの我が日本國家の西の生命線は、わづかに遼東のひがし鴨綠・圖們の二江をつなぐ三百餘里の一線上にあつた。大滿洲帝國の建設が成つて以來のそれと雖も北はわづかにオコホツク海・黒龍江をもつて限りとし、西は大興安山脈の西麓から滿洲里・包頭・洛陽を繋ぐ一線を限度としてゐたのである。然るに何故に今次不圖急激なる大進展大膨脹が行はれたものかと云へば、それは云ふまでもなく天が暴虐非道なる蔣を頭目とする國民黨政權の没落を命ずるに至つたからである。而して極東國家集團——所謂る東亞ブロックの基礎工

作茲に漸くその緒につかんとし、すなはち皇國日本の指導的地位がこの全領域の上に確立されんとするに至つたのである。斯くして豊太閤秀吉といへども、または明治維新の元勳諸公といへども、竟に夢想だもしなかつたに違ひない大いなる時代の曙が今まさに東洋諸民族の上に開かれんとし従つてわが日本國民の前にも明け放れんとしてゐるのである。夢でもなければうつついでもなく、その代りには一步を謬れば極東の全民族を驅り、收拾の途もない混亂と滅亡の深淵に追ひ込んでしまふかも知れぬほどに重大な現實の事態なのである。

生るべき極東國家集團とは何か。先づこのことを説いてゆかねばならぬ。

二、東亞プロツク出現の必然性

すでに支那事變の勃發以來、わが政府の要路者は幾度ともなく言葉を正して領土的の野心を持たざる眞意を明らかにした。領土的野心などは持たぬが、皇軍の占據地域は日に擴まる。反對に今日まで全支那の領域を支配し、その統制者たり併せて搾取者でもあつた蔣介石政權は勢ひ日に蹙まり、没落の日も遠からざる窮境にたち到つてゐる。こゝに我が國としては譬へば衷心は煩はしきにもせよ國民政府軍退却の跡地を收拾し、その領域と民生とを再建設するの道義的責務を擔はざるを得ない。これはすなはち戦勝者として、當然に負擔すべき嚴肅の義務だからである。曩に北京臨時政府が生れ蒙疆

自治政權が成立を告げたのに對し、わが國が努めて助成の態度に出たのも、後ちに維新政府が南京に成立を見るに及び、再び誘掖指導の手を延べて極力これが充實發展を圖つてゐる所以たるも、地域内の生民をして塗炭の痛苦を免れしむべく、斯くて戦禍の恢復が一日も速かならんことを念願したに外ならぬのである。

更に皇軍占據の地域内に住む支那民大衆としては、最小限度に自らを護りその老幼を養つてゆく生存上の要求からするも我が軍の保護下に立ち、みづから何等かの組織を持たざるを得ぬ筈である。況してや蔣政權軍隊の無雜作なる敗退と、公明嚴正にして犯すところもない皇軍の眞姿を睹るに及び、悪夢の恰かも醒めたるが如く、この義軍に倚つて民族保全の大目的貫徹を期し、この隣邦と共に東亞

永遠の康寧を確立するに至らんこそ理のまさきに然るべきところではないか。斯くの如くにして武漢には武漢親日政權の樹立が行はれ、廣東にもまた廣東防共政權の結成が行はれるに相違ない。これもまた、要すればその準備と時期との問題に過ぎざる事柄である。

一方、北京臨時政府と南京維新政府の合作に係はる南北聯合委員會は、十一月初旬をもつて南京に開かれた第二回委員會の席上で蒙疆自治政府の参加を可決し、中央統一政府樹立促進に關してもその總意を決するところがあつた。されば近く武漢新政權の樹立が行はれ、廣東にもまた同様の機構が成立を告げたる曉にはこれ等の各政權の大同團結も期せずして成り、こゝに甦生民國の中央新政府は雄々しくも輝かしい出現を見ること疑ひない。然してそれは、日滿支

三國の政府國民が一丸となつて極東諸民族の自律共榮を世界にむかつて宣言し、斯かる共通の理念に燃えて渾一なる超國家體制——或ひは所謂東亞大ブロックの結成に赴くべき第一日なのである。

斯うした經過の下において、すでに當然の出現を期待されてゐる東亞ブロックの新體制は、固より強大なる我が國の武力と一億國民の私心なき全幅支持とを背景とするものである。それだけにまたこの新體制は、古今東西の史上にも嘗て見たこともない程の新らしい様相形式をもつて、わが締盟諸邦の轟くばかりなる祝福と歡呼の中に、さればまた英米蘇佛諸國の囂々たる非難と疾視と咀呪との間に輝かしい誕生を告げることであらう。なかんづく我が國の政府及び國民にむかつては、英蘇の兩國などからは最も露骨なる妨害と罵詈

とが加へられることも豫じめ覺悟し置くべきであるが、さあれ、この新體制こそは政治・經濟・外交・國防等の諸部門に互つて參加の日滿支三國を一元的に統制し、齊しく地域内に包容さるゝところの凡ゆる國民々族に對し、前途への限りもない希望を與へる光となるに相違ない。斯くしてわが東亞大ブロックの新體制は全亞細亞民族に望みの星ともなり、救ひの手ともなるべきである。

思へば亞細亞大陸とその諸島嶼とが歐米諸國民のために共同の植民地または半植民地視され、こゝに住む諸民族が自律の能力さへなき劣等人種の扱ひをうけたことも久しい間であつた。さればこそ東亞大ブロックは敢然として範を南方及び西南の未解放民族に垂れ、亞細亞人の自律と共存共榮とを目指し堂々たる建設の歩武をも進む

べきではないか。それは固よりわが日本及び日本國民の私有物などではない。屬領でもない。併しながら強大なわが國の正義の武力を背景とし、並にわが一億國民を中堅的な構成要員とする地域的の諸民族共同體であり、この點を先づ理解して置かねばなるまい。

三、ブロック體制内部の整備

帝國政府は十一月三日をもつて現下時局に對する長文の聲明を發表、更に同日近衛首相はみづからマイクに立つて右の聲明を布衍しこれを全國に放送したのである。すなはち聲明は事變處理に關する帝國不動の方針を明らかにすると共に、東亞の新秩序建設を目指すわが牢固の決意を宣言したものであつて、中にも國民政府の將來に

關し

「……國民政府と雖も從來の指導方針を一擲し、その人的構成を改善して更正の實を擧げ、新秩序の建設に來り參ずるに於ては敢てこれを拒否するものにあらず』

と述べたる點は、特に蔣政權内部の自重派要人を動かすものが多かつたとも傳へられた。國共の兩黨が分裂して蔣政權は瓦壞し、こゝに蔣介石夫妻亡命の素地をつくるか、否か。或ひはまた彼が依然として迷妄極まりない敗戦主義的抗日運動の先頭に留まり、昆明へ、成都へ、更に西康・新疆へ——と、生きながらなる墮地獄の一本道を辿るか、否かに關しては、孰れにするもなほ今後暫くの経過を見る外はないであらう。

英國の對蔣援助が廣東・漢口の陥落を契機とし、果然、少くとも六・七十度を轉回の態勢を示してきたのは事實である。蔣介石夫妻としても或ひはこの邊をもつて脚もとの明るい最終の機會と考へるならば、その下野亡命と後繼要人による無條件和議要請の如きもあながちに想像されぬことではないが、併しながら假令ば國民黨政權がこの際において慌だしく抗日容共の看板を塗り替へ、わづかに四川・雲貴の三省にその餘喘を持保し得ることがあつたとしても、嘗ての所謂る抗日教育方針に基づき、前後二十年の長きに亙つて隣邦青少年の腦裡に叩き込まれた反日・抗日・排日の指導精神にいたつては、嘘にもせよ眞事にもせよ固より一朝にして塗り替え得べきではなく、従つて民心の徹底啓蒙と新體制的なる方向轉換に至つては

向後十年、或ひは廿年の努力に俟たねばならぬことをも今から覺悟すべきである。

また或ひは國民黨の内部における新人の蹶起により、舉黨没落の大悲劇だけは辛うじて免れ得たとしても、その地盤下に屬したものを除き、各省の各地に根無し草の如くに棄てられるに相違ない敗殘漂泊軍の兵匪化・思想匪化は到底避け得ざるところであるまいか搗て、なほ蘇聯とコミンテルンとを後ろ楯とする中國共產黨の現有勢力が巧みに生半可なる抗日青少年層を籠絡し、全國的なる治安の妨害及び攪亂に乗出してくるならば、これもまた最大限三・四年間の壽命には過ぎぬとしても、なほ東亞新體制の内部問題たるべく當分相當に厄介な事態を醸成するかも知れないのである。

若し夫れ國民黨要人にして竟に反省するところなく、遁竄また遁竄しながらも依然として夢のやうな最終の勝利を呼號し続けるならば、皇軍の剿滅作戰もまた抵止するところもなく續行さるべきは無論である。少くとも戦局の現状によつて判断すれば、西は宜昌を略して三峽の險阻を扼し、南は粵漢線を奄有して湖南・廣西の制覇成るまで、加ふるに北方は西安・延安を屠り赤色勢力を西北の奥地はるかに放逐し去るまでは、停まらんとするも停まり難い態勢にあらう。これも併しながら最小の限度と考へらるゝところであつて、さうした撃攘戦が一段落の後においても没落國民黨政權に對し、ならびに中國共產黨勢力に對する持久的對峙の情勢は、しかも何時徹底的の討伐行動を必要とするかも知れぬ状態において持續さるゝもの

と見る外あるまい。剩つさへ所在の占據地域地方には、(すでに滿洲事變直後兩三年間の治安状況を回顧しても知らるゝ如く)なほ數年間に亘つて敗殘の兵匪・土匪・思想匪等の跳梁あるべきをも當然に豫期せらるゝところとすれば、すなはち更生民國の新政府を擁護しこれが發達を助成する責任の上から云ふも、若しくは一段高き東亞大ブロックを建設の立場から考へても、北京・南京・武漢・廣東・西安を固よりとし、爾餘の各省主要地に對してもそれ〴〵に強力なるわが皇軍の大兵團を集中駐屯し、保安隊・自衛團の如きを掩護して地方の維持に任せしめることが必然の要務となるに間違ひあるまい。

反面更にわが占據地區の一帯に亘る難民救済と生計手段の附與、荒廢都市の復舊ならびに新幣制確立等の諸問題に至つては、これまた一日も緩うし難い當面の要務であるが、なほ一步を進めて考へるならば地域内資源の大開發による生産力の總括的擴充と、云ふうちにも各種鑛産資源の徹底的開發を行ひ、依つて以て自給的なる重工業生産の陣容を大ブロックの内部に確立すること、これを新體制自身の防衛若しくは軍備充足の觀點より見るも、到底不可缺の條件となるであらう。固より東亞の大ブロックは政治・外交・國防の各般にわたる総合的な一元統制の體制たるべく、單なる經濟的の有無相通とか、關稅墻壁の相互撤廢とか、乃至は資源の共同開發等を限度とする經濟ブロックの亞流でないことは今更こゝに絮説する必要を認めぬが、併し、然るが故にこそブロック内諸國の資源と生産と

は長短あひ補ひ、そのいよく融通無碍なるべきことをも要求されてくるのである。

すなはち、すでに去る七月の初旬をもつて北京に開かれた日華經濟協議會が、兩國經濟提携の原則を熟議の結果

一、日支經濟提携の根本原則として支那農業資源と日本工業との聯携を圖り、兩國經濟の相互依存關係を緊密ならしむること

二、石炭・鐵・電力・石炭液化・鹽及びその利用事業等の基本産業の日支共同開發

三、その他あらゆる事業における日華合辦組織の實現

四、産業開發の全般的分野に對する第三國資本の流入等、並に對第三國輸出の振興と日支共同の立場における經濟開發

の四項を議決したること。ならびに北中支の開發をそれよく使命とする兩國策會社がいつれもその陣容を整備し、經營の第一步を踏出したことはすでに周知のところであるが、翻つて考ふればこれ等は共によく原則の原則たる總論的部分の施設が漸くにして實踐の運びに就いたと云ふに止まり、例へば北中支棉花の品種改良と増産の問題にしても、農業生産を擴充の基礎條件たるべき治水並に排水灌漑の問題にしても、若しくは各種鑛産資源の開發に關聯して必要特に缺くべからざる運輸交通機關の整備建設にしても、斯うした各論的部分に至つては悉くが今後の解決に残されてゐることに注意せねばならぬ。それと同時に地域内資源の大開發による生産力擴充の問題は單に更生支那内部のこととし云はず全ブロック體制内部の問題とし

或ひは國土狹隘にして資源に乏しい我が國の工業を合理化せしめゆく要求の上から考へても、極めて喫緊の地位にあることが諒解されてくる筈である。

併し乍ら新體制内部の最重要問題とし、特に一日も速かに實現を期せねばならぬところのものは各種鑛業資源の開発と、これに基づくブロック内重工業陣容の擴充——端的には日本重工業の資源的充足と並びに其の擴大整備に外ならない。由來わが國の傳統政策は聊かならず貿易利潤を主とする輕工業本位に傾き、それが今日の如き國防軍需資材の大枯渴時代をも招來したものである。過ちは斷じてこれを再びすべきでもなく、されば政府も國民もこの際において工業政策の百八十度轉回を斷行し、本位重工業陣容の整備擴充を期す

べきであるが、更に數歩を進めて東亞大ブロックを維持並びに防衛の觀點からこの問題を見直すならば、世界史を曠しうするに足る新體制建設の大偉業が成るも成らざるもたゞこの契機に繋がり、五億萬東亞諸民族の存亡またこの重工業自給の成否に關はつてゐることに氣付かれてくる筈である。ソビエト聯邦があゝの不良なるコンディションの環境をさへ克服し、凡ゆる物資の缺乏と民生の苦惱の聲にも耳を覆ひ、遮二無二に國內重工業の陣容擴充を強行した結果が兎も角も北方の雄者たる今日を齎らし、すでに敗殘の蔣政權如きに對してすら相當量の航空機兵器等を融通し得るに至つた經過をこそ採つてもつて他山の石とすべきではないか。わが東亞の新體制が中北支の鑛産資源に俟ち、殊には今回の事變によつて膨脹を餘儀なく

された日本重工業を基礎としその陣容確立に突進しゆくならば、成果はわづかに兩三年の間に期待するも差支へがなく、難易固より蘇聯と日を同じうして語るにも足らぬ筈なのだ。

尤も長江下流の鐵鑛區に對しては、すでに華中鐵鑛公司が開發の先鞭をつけ、日鐵もまた大冶を中心として最も急速に採掘の段取りを進めてゐる。北支五省管下の鐵及び石炭鑛區に對しても、それぞれに開發の計畫が熟してゐることは疑はぬが、しかし問題はいかにしてその輸送を圓滑ならしむるかの點にも關聯しゆかざるを得ず、斯くてすなはち、大ブロック體制の内部問題たる支那交通網の建設並びに整備は、先づ以て主要なる鑛産地區若しくはその埋藏地方を第一の着手とすべく、およそ皇軍の戰略行動に並行し、眞ッ先に急

施されねばならない所以も理解されてくる譯である。

四、新體制當面の對外關係

ブロック體制の内部的問題は要するにたとゞ假すに時日をもつてしなへすれば、日滿支三國爲政者の聰明と三國民の努力とにより早晩に解決落着を告ぐべき事柄であるが、新體制の實現と共に必然に當面を餘儀なくさるべき對第三國關係の諸問題に至つてはさまで簡單に片づけ得べきでもなく、形勢の推移如何によつては一波忽ちに萬波を生じ、意想の外なる大波瀾を惹起する場合も絶無とは保し難いかも知れない。先づさうした懸念のある諸事情の主なるものを數へるならば

一、斯うした新體制の實現そのものからして、すでに今日までの外交史上には類型がなく、なほ舊支那において大小の共同植民地的な政治並びに經濟權益を保有した歐米諸國としては、固より九國條約如きの殘骸だけをでも牢守せんことを利便と考へるかも知れず、勢ひ頭からの新體制否認または反撃の手などを打つてくるかも知られぬこと

二、殊に英國の印度・ビルマ・海峽植民地等における、佛國の印度支那における、若しくはオランダの東印度諸島におけるが如く、新體制隣接の地方に老大な屬領を持つ諸國にあつては、斯かる新體制の成立發展を目して直接に既得の領有權を脅かすものとし、或ひは領民の民族意識を刺戟昂揚するものとし、力を極めて妨害

壓迫の態度に出るかも知られぬこと

三、新體制の圓滑なる成長發展は、早晚にして日滿支の三國に經濟ブロック的な自給状態（またはそれに近似するもの）を實現することに疑ひなく、これは四億六千萬の民衆とその廣漠たる領域を以て世界的なる公開の大市場と考へ、しかしそれ以上にも以下にも評價してゐなかつたマーカンテイリズム諸列強にとり、到底默過することのできぬ大變革であること

以上の三項は、萬一にも彼等の側に最良なる作戰的諸條件が恵まれ、なほ確實な勝利の見透しさへつけらるゝならば、たと一項を取りあげても優に即日宣戰の利己的理由とされるほどに重大な事柄なのである。これは萬一「若しも……ならば」との假定に基づいた文

辭である。誤解なからんことを望みたい。

さればこの重要な時期にあたつて我が國が十一月三日附の政府聲明を發表し、東亞新秩序建設に關する不退轉の決意を明かにした中にも

『列強もまた帝國の意圖を正確に認識し、東亞の新事態に適應すべきを信じて疑はず。就中、盟邦諸國從來の厚誼に對しては深くこれを多とするものなり』

と陳べ、紛々擾々たる既得權益擁護の抗議、ならびに申し入れ等に答へたことは、まさに荆棘の榛莽中に濶然として天に通ずる大道を明示したものと評せざるを得まい。英國爾り、佛國も爾り、北米合衆國もまた爾りなのである。彼等がわが國に對し、または近く生る

べき更生の新支那中央政府等に對して某々の抗議的申し入れを行はんとするならば、先づ以て東亞と東亞諸民族の上に發生しつゝある新情勢への認識を正しくし、或ひは彼等が、事變の發生以來果して自から『厚誼ある盟邦の態度』をもつて終始したりしや否やを反省し、然る上にこそ擁護の申し入れをも行ふべきである。日本國民はみづから奮起し、自らの血を流し、新體制内部の諸民族もまた自らの苦しみを苦しみつゝ、竟にこの自律的境地にも到達することが出来たのである。單に、徒らなる國際法規や條章の末に泥み、或ひは前時代的なる東亞の認識に拘はつてこれに對照となるべき現實の情勢變化を藐視し、飽くまでも化石化されたる條約の存置を圖るが如きに至つては柱に膠するものであり、イツツブ寓話に所謂馬子と備

ひ主とが、驢馬に置き去りを食はされた後にもなほ舊の儘のところ
に佇ち、驢馬のつくつてゐた陽蔭の使用權を争はんとしたものの、亞
流に外なるまい。

若し夫れ東亞大變革時代の始中終を通じ、この變革の過程に對し
て常に渝りなき友誼と厚意的態度とを示し續けた諸國に報ゆべくん
ば、敢て防共協定の參加國たると暹羅王國たるとを問はず、おのづ
からに報ゆるの道があるであらう。なほまた大勢の趨くところを察
せず、あらゆる陰謀陽謀を逞しくした非友誼的諸國に對しても、固
より報ゆるの時期と方法とがある筈であるが、主として云へばこれ
等は概ね歲月の經過が一切を解決するに相違ない。例へば舊支那の
各地に跨がり、殆んど四億餘萬民衆の死命を制した英佛米諸國の特

殊權益、コンセツションの如きにしても、多くは歲月の經過と事態
の變化とが自づからこれを解決しゆくことに疑ひなく、なほまた政
治的臭味の特に濃い各種借款の善後處理等については、我が國がみ
づからイニシアテイヴと執つて借款國會議を招集し、新らしき支那
政府のため可及的なる解決の手段を斡旋するのもまた一法たるに相
違ない。

これを要すれば、日露の戦後間もなく對支國際借款團が成立を見
たのも、一九二二年に至り日・支・英・米・佛・白・伊・蘭・葡を
當事國とし、所謂る九國條約が締結さるゝに至つたのも、その目的
及び動機たるは廣一千百萬餘平方キロの支那全範圍を一種の國際管
理下に置かんとした二・三大國の底意に出發せるに外ならず、或ひ

は我が國の羽翼がなほ成らざりしを奇貨とし、支那を永久に列國の共同植民地形態に置かんとする方策の現れだつたのである。故にまた日滿支三國の提携が今こゝに成り、東亞の康寧を東亞諸民族の手によつて確保せんとする新情勢の展開さるゝに至つたことは、すでに上述せるが如き歐米勢力の一方的なる聳斷・跋扈の如きが、到底ゆるさるべくもない新らしい段階に達したことの歴然たる證左ではないか。新體制の中にたつ三國の政府及び國民としては、固より磐根錯節を意に介すべきでなく、たゞ斷乎として所信の實踐に邁進すればよい譯である。

英佛米の諸國に關聯する新體制當面の問題は、大凡そ上述した通りである。眼前の事態ではこれ等の諸國が、敢て實力に物を言はせて

までも否定・強壓の手を伸べてくる事などは全く想像にも及ばぬところであるが、併しながら對蘇聯の關係となれば——これは率直に云へば近き將來において、わが東亞ブロックは好むと好まざるとに論なく、到底一戦を交ゆることは避け得ないであらう。それは今日においてさへ、蘇聯がわが國に對し決然として戦ひを挑んで來ない所以のものは、兩國の外交關係になほ友誼の殘缺が置き忘られてゐるためでも何でもなく、たゞ同國內部の肅清がいまだに完からず民心の安定統一を缺き、加ふるに赤軍が戰鬥力と士氣とにおいて甚だしく弱點だらけであることを自認せるために外ならぬからである。スターリンと彼を繞る莫斯科政權の當事者にして夙く必勝の成算に自信づけられてゐたならば、敢て武漢の陥落と蔣政權の邊境遁竄と

を待つまでもなく、すでに乾岔子島事件の當時において、若しくは正勇峯局地戦の當時において、堂々その海陸の兵員を總動員したに相違ないのである。

一方また我が國の側から見ても、今ではすでに奥庭の蓮池たるに過ぎぬ日本海の彼岸に沿ひ、蘇聯がウスリー・沿海州に亘つて老大な過重軍備を擁することは、實は聊かならず迷惑至極のことである故に蘇聯が近き將來において極東一帯の地域からこの過大兵備を撤去し、釋然、他意なきの態度をでも示してくれば格別だが、さもない限りには假令ばイデオロギーの相違を第二次の問題としても、帝國を固より、わが東亞大ブロックの新體制といへども早晩に起つて實力的の手段に懇へ、この過大兵備を撤去せしむるの日がくるので

あるまいか。しかもそればかりではなく、現に陝西・甘肅・新疆の一線を軍需ルートとして蔣介石政權に協力し、執拗に皇軍の進撃を阻まんとしてゐる中國共產黨勢力が聽て西北に敗退し、同時に蘇聯の尻押しのなる使喚態度が一段と強化されてくる場合等も起つてくれば、わが東亞大ブロックは敢て必ずしも數年の後を待たず、奮然起つて一撃を彼の頭上に加ふる如き事態への推移も、必無とは保し難いのである。由つて日滿支の三國民は到底一戦の避け難きを覺悟し、今よりして自重自戒し準備を怠らざるべきである。

五、防共強化と金保有の問題

去る十一月六日をもつて成立一週年を慶祝された日獨伊三國の防

を待つまでもなく、すでに乾岔子島事件の當時において、若しくは正勇峯局地戦の當時において、堂々その海陸の兵員を總動員したに相違ないのである。

一方また我が國の側から見ても、今ではすでに奥庭の蓮池たるに過ぎぬ日本海の彼岸に沿ひ、蘇聯がウスリー・沿海州に亘つて老大な過重軍備を擁することは、實は聊かならず迷惑至極のことである故に蘇聯が近き將來において極東一帯の地域からこの過大兵備を撤去し、釋然、他意なきの態度をでも示してくれば格別だが、さもない限りには假令ばイデオロギーの相違を第二次の問題としても、帝國を固より、わが東亞大ブロックの新體制といへども早晩に起つて實力的の手段に懇へ、この過大兵備を撤去せしむるの日がくるので

あるまいか。しかもそればかりではなく、現に陝西・甘肅・新疆の一線を軍需ルートとして蒋介石政權に協力し、執拗に皇軍の進撃を阻まんとしてゐる中國共產黨勢力が聽て西北に敗退し、同時に蘇聯の尻押しのなる使喚態度が一段と強化されてくる場合等も起つてくれれば、わが東亞大ブロックは敢て必ずしも數年の後を待たず、奮然起つて一撃を彼の頭上に加ふる如き事態への推移も、必無とは保し難いのである。由つて日滿支の三國民は到底一戦の避け難きを覺悟し、今よりして自重自戒し準備を怠らざるべきである。

五、防共強化と金保有の問題

去る十一月六日をもつて成立一週年を慶祝された日獨伊三國の防

共協定が、歐亞の兩大陸に跨がる新情勢への打開日程に寄與したところの効果と、並びに當事三國の國威の伸長に貢獻したところの大意とは、蓋し測り知り難いほどであつた。さればこそ近衛首相も政府聲明を布衍の大演説においてこの點に説き及び

『……今次の事變に對し兩國の寄せたる精神的援助が我が國民を鼓舞するところ大なるものありしは我々の深く多とするところであります。我々は事變を通じてこの盟約を愈々緊密にする必要を痛感するのみならず、進んで共通の世界觀の下に世界秩序の再建に協力せんとするものであります。……』

と述べたのに相違ない。抑も首相以下の要路者は果して如何なる具體的方法により『この盟約を愈々緊密にする』決意であらうか。腹

案のほどは窺知する由もないが、併しながらこれは協定成立の後に於ける一年間の経過を考へても、わが防共の三大盟邦が百尺の竿頭に一步を進め、あひ共に滿腔の熱意を傾けて攻守同盟條約を締結し世界の現状墨守的なる舊勢力に對すべき時期に到達したことの暗示であるまいか。世上には或ひはこのことを以てすでに定まれる暗黙の諒解事項とし、今更に事々しく成文化するにも及ぶまいと説く者もあると思はれるが、これは併しながら新興の三大國がそれらに今後の國策を行ひ、若しくは共同の主張を提さげ世界に呼び掛けるための便宜からも、當然に履むべき手續と考ふべきであらう。佛蘇は早く相互援助條約を締結し、英佛の間にもまたすでに海空軍の共同協定が結ばれたのだ。日・獨・伊の三國に限り、たゞその全體

主義國家群なるの故をもつて軍事條約の締結を遠慮すべき謂れもあるまい。加之にこうした遠慮勝ちな行き方こそは、今までも口頭禪ばかりの民主々義諸國をして七つの海にのさばらしめた原因だつたのだからである。

對外關係は日獨伊攻守同盟條約の締結により、東亞新秩序建設の一本槍をもつて猛進すべきであるが、差當りの重大問題たる正價の維持と國際收支の均衡確保に關しても、やり方によつてはまだ幾多の方策が残されてることを指摘したい。それはすなはち勞費の大小等に介意することなく

一、滿洲國並びに北中支の皇軍占據地方に亘る全圓——所謂る圓ブロックの圏内を隈なく涉獵しさへすれば、現に第三國よりの輸入

に俟つてゐる重要諸物資、若しくはそれ等と代換し得べき物資を獲得蒐集することも易々たるものである。すなはちこれを我が國に急輸しさへすれば、それだけにブロック圏内諸地方に對する貿易收支を均衡に近づかしめ得られるのと。更にいま一つは

二、大規模なる産金計畫の樹立によつて内地・朝鮮・臺灣・滿洲國にわたる低位金鑛區並びに貧弱金鑛區を急速開發し、すべての損失を國庫の犠牲的補償に俟つ採金鑛業を確立する。或ひはこれを政府直接の管理として偏へにその絶對的増産を幾庶するならば、年額二・三億程度の増産の如きは比年ならずして實現し得られるに相違ない。

抑も對圓ブロックの輸出貿易が國策の惱みたる所以のものは、

現下の實狀においてはそれが概して輸出する一方の片貿易に終り勝ちな嫌ひがあり、反面には爲替管理・輸入並びに國內消費制限等の非常時の政策を強行し、努めて外貨の獲得を期してゐるにも拘らず、それがたゞ對圓ブロックへの出超増大により、肝腎の一點において尻抜けとなつてしまふに因るのである。換言すれば、圓ブロックの圏内より行はるゝところの輸入にして我が國よりする輸出の増大に追隨することができ、若しくは両者が常に大凡そ均衡に近い状態に維持されてゆきさへすれば何等の懸念もない筈である。故に然らば非常時的なる根本對策にして決定樹立さるゝところがあり、一例は棉花の如く、羊毛の如く、或ひはまた各種の重工業原料品の如く、從來大部分を第三國の輸入に俟つた凡ゆる物資をブロック圏内の凡

ゆる地方地域に涉獵し、質量の多少を問はず、價格の高低を論ぜず輸送の便否等にも頓着なく、遮二無二にこれを日本内地に輸入する如き方式さへ採用せられるならば、一方にはブロック圏内諸地方を對手どる輸出入貿易差を減少し得らるべきと共に、反面にはまたそれだけづゝをブロック外第三國よりの實輸入額減少に振向け得る譯ではないか。斯うした政策の採用によつて生ずべき損失が國庫の負擔に歸すべきは論ずるまでもない事柄であるが、併しながら聖戰の大目的を貫徹のためにはこれ等は極めて些細の犠牲であらう。政府要路者にして、この計畫に必要な技術者と現地勤務員の大群を銃後の非戦闘員の中から動員徵用するほどの覺悟さへ定まれば、これは明日からでも實行に移し得べき事柄である。

次に第二項に挙げたところの非常時の金増産方案については、改めて解説するまでもあるまい。精煉までの全工程を通じて一グラム六圓、一匁につき二十圓若しくは二十五圓にあたる金鑛區は、現状においては到底稼行不能の鑛區であるが、併し若しこれに對して一匁の産出ある毎に十三圓宛の損失補償さへ行はるゝならば、十分に稼行に値する鑛區となるであらう。現下の如き財政状態下にあつては、たとへば産金の年額五億圓を増加のために五億圓の稼行損失額が増發補償されたとしても、或ひはまた多少の紙幣インフレ状態の發生があつたとしても、そこには自づからに對策があり得る筈である。固より深く意とするにも當らぬものである。

たと併し、以上の二案は固より非常時局下の應急對策である。行

はずとも濟むことならば行ひたくない方策であるが、他に奈何ともするなき事態等に當面する虞のある場合には、敢て斷乎として強行もせねばなるまい。こゝにはたと今後のために、方案の概念を摘記するに止めるのである。

六、大生命線の防衛と日本國民

國防線と國境線とは多くの場合においてあひ一致するが、廣義の所謂生命線は必ずしも國境線と一致せず、しかも概ね國境線外にあるのを常型とする。日露戰役までのわが國の西方生命線すら關釜海峽を越えて遙かの西に寄つた鮮滿國境にあり、爲めに兩國の衝突となつたことは最も手近な一例である。すなはち斯かる見地に立ち

近く生るべき東亞大ブロックの生命線を概定するものとすれば、東は西經百六十度・南に南緯十度の線を限りとし、北は暫くカムチャツカ半島よりバイカル湖を連ぬる一線によるべしとするも、西方は實にサヤン山脈よりバミール高原を貫き、更にヒマラヤ・印度支那の兩山系を東南走してサルウイン河の河口、マルタバン灣に至る線上に置かれざるを得ない。又以上に關聯して考察するならば暹羅は云ふ迄もなく獨立王國であり、印度支那は佛國領であり、東印度の諸大島又固よりオランダの屬地であつて、わが東亞ブロックは之等の地域に對し特殊の地位を主張せんとするものでもなく、且つ其領有を意圖するものでもないけれども、而し若しオランダにして新たに諸大島中の一・二を他の強大な第三國等譲渡する如き事態でも

發生し來るならば、新體制は到底之を傍觀し得るものではなく、或は暹羅王國の領土主權などが某々の強國により新らしい壓迫侵害を蒙る如き場合が起つたとしたならば吾等は決して晏如としてこれを黙過する譯には行かぬ。奈何となれば之等は齊しく新體制を中心とする東亞の現實に對し、新たに加はらんとする外來的の壓力たるに外ならず、延ては東亞ブロック其物を脅威するからである。新支那の西限たるべき新疆及び西藏等に對する蘇聯並びに英國の侵入勢力が、更に一段の積極性を加へ來る等の場合に於て、三國ブロックの執るべき處置方策に關しては改めて説くを要せざるところであらう。東亞大ブロックが日本及び日本國民の專有物でないことについては、すでに前文にも説き及ぼした通りである。新體制の建設と防衛

と推進もまた固より東亞諸民族の共同責任たるべきであるが、併しながらこれを現實の事態に鑑がみ、なほ體制自身が發生にいたる迄の経過について考へるならば遠き將來を知らず、少くもこゝ四・五十年間にあつては例へばその軍事外交にあれ資源の開発にあれ、或ひは内部機構の調整擴充にもあれ、主要部分の七・八割までは擧げて我が政府並びに一億國民の負擔たらざるを得まい。これを要すれば新體制はその將來への成否も興廢をも、一に以て大ブロックの内部に中堅成員たる日本及び日本國民の努力と奉仕の如何により、決さるべき運命にあるのである。故にまた我が一億餘萬人の同胞は、今にこそ名實あひ件なふ東亞の盟主國民として、或ひはすなはち全亞細亞民族中の指導國民として深く／＼負ふところの責務の重大なるを思ひ、敢て百難を突破するの大信念と、榮辱興廢を滿支五億の民生と共にするの覺悟とをもつて、はるかなる大建設の道程を出發せねばならないのだ。東亞大ブロックの大生命線が、直ちにもつて我が國の生命線に外ならない第一の理由なのである。

併し、それよりも更に重要な事柄は我が日本國民の今からの生存が、すでに日本々土内の資源だけでは到底賄ひきれなくなつてゐること、並びにこの度の支那事變が、勃發の後僅に一年有半の経過にも拘らず、日本及び日本國民としては絶対にアト歸りもならぬ程度まで餘儀なく深入りしてしまつたと云ふことである。これは聊か率直に過ぎる言葉かとも思はれるが、敢て自らを戒むるためにも直言が許されるならば、東亞新體制の大事業が萬が一にも失敗に終る

ことでもあり、皇軍と國民とが手を束ねて大陸から總退却する如き場合ともならば、金甌無缺と二千六百年の傳統を誇りとする大日本帝國は十中の八・九までも破産の外に道なく、なほこれと共に一葦の西に連なる東亞大陸の全地域は、擧げて悉く歐米列強の分割に委せられてしまふ。それが、火を睹るよりも瞭らかだと云ふことである。斯くてはわが日本をも含む亞細亞と亞細亞諸民族の上からは、光榮の自主自律を得るの機會までが永遠に失はれてしまふ譯ではないか。今日の東亞諸國は、それほどにも重大な死活の關頭に立つてゐることを――、理性ある國民は苟くも牢記して忘るべからざると共に、われ等の手により、斷じて新體制建設の大業を完うせねばならない所以である。

今やわが日本の西の生命線は朝鮮國境にも無ければ大興安嶺山脈にもなく、洵に、黃沙千里の彼方なる新疆・西藏の線上に横はるところとなつた所以の理由も、これによつて理解し得られたものと思ふ新疆・甘肅の西北路線にして一度び赤軍の蹂躪に委されんか、潼關の嶮も遂に護りの全きを得る能はず、或ひはヒマラヤ山彙以北の地にして大英帝國の領域たらんか、西康・雲貴・四川の運命もまた知るべきのみで、それは直ちに新東亞體制崩壞の第一歩たるべく、取りも直さずわが大陸政策破綻の前表たらんが故なのである。忠誠一億の日本國民は、宜しく活眼を開いて西方生命線の繋がるところを凝視すべきである。

結 言

結成實現の日もすでにいよいよ目睫の間に近づいた東亞大ブロックの新體制が、或ひは崩壊に垂んたりし東亞の恢復と、極東諸民族の自律共榮とを根本の指導原理とすべきに關しては、以上をもつて大凡そ其の要を盡すことを得たものと考へる。しかも斯うした新體制の出現は、反面には現に老衰困憊の極に陥り、歐米勢力の鐵鎖の下に喘いでゐる爾餘の黄色諸民族に對しても、多大の精神的暗示を與へることであらう。或ひは強力なる無言の激勵たるべきを疑はぬものである。勢ひもつて新體制は世界の注視をこの一點に集中すべきと共に、嘗て前後門の虎狼たりし歐米の諸國からは囂々たる非難

と呪咀の一齊射撃が加へられてくることにも疑ひあるまい。これこそは新たに生れんとする者への試練であり、また新しき世界の創造を庶幾するものが當然に忍ばざるを得ない迫害であるが、併しながら三國を通算すれば或ひは六億を突破するかも測られぬ大人口――地上に現存する人類總數の凡そ四分の一を越える大人口と、世界陸地總面積の十分の一にも近い廣表を領域とする東亞大ブロックの一舉手一投足は、すでにそれだけを以てするも世紀の驚異であり、世界を瞠目せしむるに足る大勢力であらう。

しかも我が日本國民は――、否わが日本國民こそ、斯うした大事業の先頭にたち、大建設の主要部分の悉くを負擔してゐるのでないか。思ふてこゝに至る。われ等は建國似來二千幾百年間にわたる歴

代の先人だちさへ嘗て夢想だもしなかつた大いなる時代の中に、今ぞ敢然として起ちあがつてゐることに氣付かれてくるだらう。近くは明治・大正の民族的勃興躍進期の國民といへども、或ひは一人として思ひも設けなかつたと想像される大時代の到來を、今わが昭和の國民は上は總理大臣より馬を片田舎の野道に追ふ村童までが身をもつて體驗し、それづくに大いなる役割の一部分づゝを分擔せんとしてゐるのである。國民は宜しくこの重大時局を痛感すると共に慘として驕らず、肝腦悉く地に塗るゝも悔いざるの義勇奉公心を發揮し、偏へにたゞ先人に對して恥ぢなく、子孫に對して憾みなきの努力を致すべきである。繰返してこの一事を要請し、拙文に筆を擱く次第である。

昭和十四年一月三十日印刷
昭和十四年二月五日發行

「新東亞建設の要諦奥附」

定價金拾五錢也



著者 砂田久政
東京市四谷區舟町六二番地
 發行者 砂田茂彦
東京市牛込區足柄田橋町三〇五番地
 印刷者 石原勘一郎
東京市牛込區早稻田橋町三〇五番地
 印刷所 文陽社印刷所

發行所

國防協會

電話四零五八六六番
東京一五三四四番

陸軍省新聞班編纂

空 中 國 防 の 趨 勢

印刷實費
金拾五錢

航空界の顯著なる發達は、近代文明の産んだ一現象であるが、此の文明の利器飛行機が戦争の具に供せらるゝ時、地上のあらゆる文化施設を叩き壊し、焼き盡してしまふ、今日防空の必要が世界の隅々に迄唱へらるゝに至つたのは、人間福祉擁護の聲に外ならぬと共に、文明「デレンマ」の叫びでもある。

我が國現下に於ける最大の關心事は國際情勢の緊迫に伴ふ空襲の脅威である。今日防空の完璧を期せんとせば列國航空の趨向を究め、以つて航空力の充實を計り國土の防衛に備へねばならない。本書は如上の趣旨に基き刊行されたものである。廣く一般の御購讀を乞ふ。

東京市四谷區舟町二六

發行所 軍事通信社 振替東京 二一六五番

海軍省海軍軍事普及部校閲

海軍大將

山本英輔閣下序文

印刷實費

海軍少將

匝瑳胤次閣下 著

金拾五錢

事變下に於ける

帝國海軍と國民への要望

山本海軍大將序文(抄)……匝瑳少將は世人周知するが如く日露戦争に於ける旅順口第三回目閉塞隊の勇士であつて、笑つて死地に飛込んだ惡戰苦闘の體驗者である。今此の人に依つて本書の著述を見たるは洵に時宜に適したるものと考へ欣懐に堪へない。願はくは之に依つて吾國民がより廣くより善く、海軍事情の徹底化を圖られん事を熱望する。

かくして軍民一致聖戰の意義を闡明し、事變の最後の解決に邁進せんことを望み次第である。

東京市四谷區舟町二六

發行所 軍事通信社 振替東京 二一六五番



文部大臣 荒木貞夫閣下題字
 陸軍大將男爵 有馬良橋閣下題字
 明治神宮々々司 鈴木孝雄閣下題字
 靖國神社宮司 林銑十郎閣下題字
 陸軍大將 山本英輔閣下題字
 海軍大將 土屋篤閣下題字
 陸軍少將 土屋篤閣下題字
 海軍少將 土屋篤閣下題字
 海軍少將 土屋篤閣下題字
 軍事通信社 砂田久政著

(定價金壹圓貳拾錢)
 (送料 金 六 錢)

勤王の先覺者 山縣大貳先生傳

附・柳子新論(和文)

土屋少將(序文抄) 近世史に學者として名を残して居る者は、枚舉に暇ない程あるが罪を懼れず、死を顧みず、尊王の大義を敢然筆にし、遂には自ら起つて幕府を覆滅せんとまで計つた人は、實に山縣大貳先生を以つて嚆矢とする。

東京市四谷區舟町六二

發行所 軍事通信社
 振替 東京 六五六一番
 振替 東京 六五六一番